

---

# FAIRY TAIL ~ 氷原の支配者 ~

レイラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FAIRY TAIL 氷原の支配者

### 【Nコード】

N3748Y

### 【作者名】

レイラ

### 【あらすじ】

氷の滅竜魔導士。クロウ・アイスリバー、有名な実力者が集う傭兵ギルドの中でもその強さは上位のもの。そのクロウが妖精の尻尾の魔導士と出会うとき物語は始まる・・・

## プロローグ

俺は傭兵ギルド死の薔薇の魔導士だ。ギルドと言っても皆がまとま  
っているわけでもなく、仕事をもらうだけの場所となっている。

なので顔を知らない魔導士も多く、勝手に辞めていくものもいる。  
こんなギルドでも金が良い仕事が入ってくるので色んな奴が集まっ  
てくるわけだ

俺「今回の仕事は・・・」

幽鬼の支配者というクソギルドの用心棒。そのギルド事態は気に入  
らないがこのギルドへの依頼といたらこんなものばかりだ。い  
い加減慣れてきている、それに強い奴と戦えるという楽しみも増え  
るしな

俺「それじゃあ、行くとするか」

そうして俺は幽鬼の支配者のギルドへと向かうのであった

## プロローグ2

ジヨゼ「待ってましたよ、氷竜のクロウさん」

俺「で、用心棒とか言ったか。何かに狙われてんのか？」

それにしれも、変わったギルドだよな。今俺がいる幽鬼の支配者のギルドは動いている・・・というより、どっかに向かって歩いているみたいだ

移動できるなら誰かに狙われることなんてあるのか？そもそも、このギルドはどこに向かっていているんだ？

ジヨゼ「妖精狩りですよ、貴方ならわかるでしょう？弱者との優劣を決めたい、この気持ちだ」

俺「興味が無い」

やはり下らない用事だったか

ジヨゼ「相手がこのギルドに攻めて来た時には貴方に足止めをお願いしたいのです」

俺「それで用心棒か」

ようするに、コイツの我俣にこれから付き合うハメになるってことか

ガジル「ギヒッ、テメエの出番は無エから安心してろ」

さて、敵が来るまで待つてるとするか

それまで眠ってはいやうじゅう・・・

## 火竜と氷竜

俺は夢を見た、俺がギルドに入って騒いでる夢だ

どこのギルドかはわからないが、楽しかった・・・

俺「・・・ん？」

ガジル「いつまで寝てんだテメエ」

さつきからちよくちよく鬱陶しい奴だ・・・たしか、ガジルといったか。俺は外を見る、その戦況は一方的で相手はギルドを一所懸命に守ろうとしている

俺「何でこんなことやってんだかな」

そう呟き、ある時間まで俺は敵を待ち続けることにした

ジヨゼ「敵がギルド内に侵入したようで、よろしく願いしますよ  
クロノさん」

俺は無言で敵とやらがいる場所へと向かって行く

??「うおー！！動力源はどこだー！！」

随分と騒がしい奴がいるな

俺「オイ」

??「あ？何だテメエ・・・ファントムか！」

俺「どうだろうな・・・それより名は？俺はクロノ。死の薔薇のクロノだ」

ナツ「俺は妖精の尻尾のナツだ」

俺「動力源とか言ったな？それは、あの魔法のことか？」

俺は外を指差しながら言った

ナツ「この巨人の動力源だ」

俺「簡単なことだ。これはエレメント4を倒せばそれで止まる」

ナツ「ホントか？ありがとなー!!」

そう言って通り過ぎていこうとするところを俺は手で止めた

ナツ「なんだよ、まだ何が用があるのか？」

俺「残念なことにはこのギルドの用心棒をやっていてな。付き合ってもらっぞぞ」

そう言って俺の腕は氷へと変化していく

ナツ「面白エー!!燃えてきたぞー！」

ナツは拳に炎を纏っている。どうやら滅竜魔法を使っらしい

ナツ「火竜の・・・」

俺「氷竜の・・・」

二人「咆哮！！」

二人の滅竜魔導士のブレスがぶつかりそのフロアは爆風に包まれた・

ナツ「お前・・・滅竜魔導士なのか！？」

俺「ああ・・・それが、どうかしたか？」

そうして戦闘は何故か一時中断され共に育ての親の竜の話をしていた

ナツ「お前も七年前なのか・・・」

俺「何かありそうだな」

と、俺は魔力の流れに気がつき咄嗟にナツの後ろへと手を伸ばす

俺「ふせる！！」

ナツがふせたのを確認してから氷竜の咆哮を放った

アリア「おや・・・裏切ったというのですか」

俺「人の戦いを邪魔してんじゃねえよ」

アリアはまだ気づいていない。俺のブレスの力を

アリア「ならば二人まとめて消してあげましょう・・・ん!？」

アリアの腕は氷つき、周りの空気も凍結状態となっていた

アリア「こ・・・これは!？」

俺「氷竜の息吹は全ての時を止め、破壊する・・・こんな感じの部屋だったらこのぐらい簡単なんだよ。氷竜槍!！」

腕が氷の槍へと変わりアリアを貫き、アリアは倒れた

俺「ま、死にはしねえから問題ねえよ」

ナツ「お前ら仲間じゃなかったのか・・・!？」

俺「これを見る」

俺は右の拳にある薔薇の紋章を見せた

ナツ「ん?ってナニー!!!？」

紋章が徐々に消え始めているのである。これは、前もって辞めると言っておいたのが手続きが遅れているせいで今になって完了した証拠だ

俺「俺は今日のこの時間をもって、やっとギルドを抜けた。ってことで今はフリーの魔導士だ」

ナツ「なるほど・・・って、よくわからねー!！」

コイツ、アホだ……

俺「てか、コイツが最後のエレメンタル4になるのか？ま、どーでもいいけど。それより、俺はこのフロアに残るから先に行ってこいよ」

ナツ「あ？どうしてだよ」

俺「お前の仲間はお前の手で助けてやれってことだ。頑張れよ、お前なら勝てる」

ナツ「うおおおお！！！！燃えてきたアアア！！！」

そのままナツは上へ飛んで行ってしまった

さて、俺はこれからどうすっか……俺は一人フロアで座っているのだった

## 氷と闇

しばらく座って待っているとナツが入ってきたところから数人の魔導士が現れた、どれも妖精の尻尾のようである

??「アリア・・・?どうして・・・」

本来ならこの場にいるはずのナツはおらず、代わりに倒されているアリアがいて隣には見知らぬ青年が座っている

??「お前は何者だ?」

俺「俺はクロウ、そういうお前たちは誰なんだ?」

エルフマン「すまん、漢なら先に名乗っておくべきだったな。俺はエルフマン」

グレイ「俺はグレイだ、そこでこっちがミラ」

グレイは銀髪の女性を指さして言った

ミラ「あなたはファントムの魔導士なの?」

俺「いいや違う、ついさっきまで依頼を遂行しようとしていたフリーの魔導士さ」

グレイ「ってことは俺らの敵じゃねえってことか?それでソイツはどうした」

どうやら三人ともぶっ倒れているアリアが気になるようだ

俺「ん？ああ、コイツか。俺が潰したよ」

三人揃って驚いていたが今はそんなことどーでもいい

俺「お前等三人は早くこっから逃げたほうがいいぜ、クソ野郎が来るからな」

ミラ「え？」

ジヨゼ「クソ野郎とは・・・随分と口の悪いガキだ」

そう言つて異質な魔力モトイ、気色悪い魔力を放ちながら幽鬼の支配者マスター。ジヨゼが姿を現した

俺「事実だろ？それから、そこの三人はとつと帰んな。死ぬぞ」

その言葉の直後にジヨゼが魔法を放つが俺は氷の弾丸でそれを凍らせる

ジヨゼ「魔法まで凍るのか」

俺「氷双竜の息吹・・・その程度なら余裕だ」

俺の手には氷の二丁拳銃が握られている

ミラ「逃げるって・・・アナタを置いては「早く行け！それとも死にたいのか？」・・・っ」

三人はこの部屋から出ていった。どうやら、何とか言うことを聞いてくれたようだ

ジヨゼ「さて・・・楽には死なさんぞ」

俺「はっ・・・上等だよ」

ジヨゼの放つ魔法と俺の撃ち出す氷結弾がぶつかり合い両者互角の戦いを繰り広げていた

ジヨゼ「ほう・・・ここまでやれるとはな、少し驚いた」

俺「ちっ・・・その割には随分と余裕そうじゃねえか」

俺の判断が正しければコイツはまだ全力じゃねえ・・・だったら、こっちも奥の手は隠しておくべきだろう

ジヨゼ「だが、流石に飽きてきたなそろそろ消してやるとするかデ  
ツドウェイブ!!」

死の波動が俺へと迫ってくる

俺「まだ、甘いな氷竜の甲壁!!」

俺は巨大な氷の盾で防いだ

ジヨゼ「まだ、そんな力を持ってやがったのか。だがこれで終わ  
りだ、ヘルバインド」

突然足元から現れた闇の手に捕まり身動きが取れなくなる

俺「しまった……!!」

迂闊だった……!魔力の温存を考え油断してしまった

ジヨゼ「ったく、手間取らせやがって。少しずつメエの命を削ってやる」

死神が二体現れ、俺の体を闇が蝕んでいく

俺「ぐあああつ……!!」

ジヨゼ「丁度いい、八エどもの味方をした奴らがどうなのかを見せつけてやるか」

妖精の尻尾 side

ジヨゼ「よく見てろよ?お前等、妖精の尻尾の味方をした魔導士の末路をオ!!」

クロウ「あああああ!!」

一人の青年が闇に侵食されていく

カナ「アイツ……!!」

ミラ「なんて酷いことを……」

それは絶望そのものだった、自分達の味方をしたがために殺されていく者の姿

だが、そんな悲劇な結末では終わらなかった。一筋の光が差し、闇を消し去ったのである

side out

クロウ side

俺「くっ・・・このクソハゲが・・・！」

俺は突然現れた光に救われた

マカロフ「お前さんは、良くやってくれた。今は休み、わしに任せ  
ておれ」

俺「そうかい・・・そんなじゃ、じーさんのお言葉に甘えて少しや  
すむ」

そこで俺の意識は途切れた

## 氷と闇（後書き）

ヘルバインドはオリジナルの魔法です！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3748y/>

---

FAIRY TAIL ~ 氷原の支配者 ~

2011年11月18日00時32分発行